

## 2016～2017年度 関西大学研究拠点形成支援経費研究成果報告書

著者	与謝野 有紀, 林 直保子, 林 武文, 井上 卓也, 田中 孝治, 池田 満, 堀 雅洋, 菅原 慶乃, 中谷 伸生, 山本 卓, 山本 登朗, 坂本 美樹
雑誌名	関西大学研究拠点形成支援経費研究成果報告書
発行年	2019
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017635">http://hdl.handle.net/10112/00017635</a>

# 吹田の人形芝居・出口座の公演音声・映像資料について — 解題と考察

菅原慶乃

はじめに

1975年9月、吹田市出口町に人形劇団「人形芝居・出口座」が旗揚げした。その中心的な存在だったのが、1950年代より「大阪人形座」に加盟し人形劇上演・普及に尽力してきた阪本一房氏（1919年～2001年）である。出口座旗揚げに遡ること7年前の1968年5月、阪本氏の呼びかけに応じて集まった吹田市在住の文化・芸術活動愛好家らが吹田人形劇研究会（略称「吹人研」）を立ちあげた<sup>1)</sup>。1973年頃、阪本氏の他、「マリーニ」の小田又治郎氏、「府職サークル」の片桐正雄氏、「さんしょの実」の金田一男氏の4名が「吹人研」内部サークル「傀儡」として活動を始めるが、大阪人形劇協議会「浪速人形瓦版」の記者として、2名の若手人形劇愛好家、「だいこんおろし」の西沢ますゐ氏、「ぴいまん」の芦原恵子氏がこれを取材したことを契機に、「傀儡」の活動へ合流する<sup>2)</sup>。こうして、吹田に常打ち人形劇劇場を開設する計画が議論されるようになった。丁度、吹田市立中央図書館北（出口町）にあったある会社の独身寮（管理人であった森たかみち氏により後に「六雅荘」と名付けられた）の別棟にあった一階建の食堂が使われなくなったという話があったことから、交渉の末に芝居小屋として使用できることになった<sup>3)</sup>。改造の末、収容人数30余名の人形芝居劇場・出口座が落成し、1975年9月に柿落とし公演が行われた。以来、「出口座」は、度重なる座員の入れ替わりを経験しながらも、2000年4月の解散までの間25年という長きにわたって地元・吹田市を拠点に関西一円の人形劇文化の一翼を担った。

数ある人形劇団のなかでも、出口座の人形は一部の演目を除き多くがマリオンネットによる人形芝居であったという点で特徴的であった。頭部（両耳）、両手、両肩、背中、腰、両足の合計9箇所を糸でくくりつけたバーガー（操作木）で操る出口座のマリオンネットの構造は、出口座の前身で、戦前に東欧式のマリオンネットを導入した「大阪人形座」の人形造形を継承したものであった。後章で確認するように、出口座の演目や人形の造形はもとより、出口座代表の阪本一房氏の「人形芝居」における理念や理想は、1920年代の大正新興美術運動の流れを汲む「人形座」や、その分流ともいえる「大阪人形座」のエッセンスを直接的に受け継いでいるといえる。この意味において出口座は、吹田という地方都市において活発に活動したアマチュア人形劇団であったと同時に、日本における近代人形劇史の創成期の息吹を現代に伝える貴重な橋渡しの役割も担っていた。

出口座の解散後、公演で用いられたマリオンネット人形や音声テープ、一部の公演記録映像は、出口座の旗揚げから長く座員を努めて来られた山下恵子氏により保管されてきた。山下氏は出口座の解散後も長きにわたりその活動を世に広く伝えるべく、数々の企画を実行してこられた。例えば、吹田市立中央図書館1階ロビー奥（階段脇）における出口座のマリオンネット人形の常設展示は、山下氏の代表的な活動の一つである。「出口座」のレパトリーで用いられたマリオンネットや小道具に加え、演目の解説資料も合わせて展示するこの活動は、山下氏が数ヶ月おきに資料を入れ替え、長期に渡って継続しておられる。吹田市立中央図書館では2016年5月22日に「マリオンネット 動かしてさわって遊んでみよう」と題されたマリオンネット人形操作の体験会が、また同年10月から11月にかけて全5回の「マリオンネット（糸あやつり人形）作り方講座」が開催された。山下氏をはじめとする元出口座座員有志により企画・運営されるこの講座では、数回に渡って簡便な作りのマリオンネット人形を製作する内容で、最終回には実際にバーガーを操作して動かす技術についても教授された。

近年山下氏は元座員有志との連携、協力の下、出口座の資料を比較的網羅的

に展示する企画展を開催されておられる。近年の例では吹田市立中央図書館での「阪本一房懐古展」（2015年11月22日～24日に）や、吹田歴史文化街づくりセンター・浜屋敷における「阪本一房と吹田の民話と人形劇」（吹田市文化振興事業団主催、2017年10月21日・22日）などが挙げられる。前者においては、出口座の人形の展示に加え、阪本氏の再話をもとに製作された吹田の民話紙芝居が上演された。後者においては、在阪の人形劇団による人形劇や紙芝居の公演に加え、山下氏の協力のもと出口座マリオネット人形の展示と公演映像が上映された。

山下氏を始めとした元出口座座員諸氏は、出口座が残した資料を吹田市という地方都市における庶民の文化財としてとらえ、それを保存するだけでなく、次の世代へ継承してゆく明確で積極的な意志を持っておられる。筆者は、関西大学戦略的基盤形成事業「社会的信頼システム創生センター」の助成と協力を受け、山下氏を始めとする出口座の元座員の方々、吹田市立中央図書館、そして本学を結びつけ、本学の地元・吹田市における庶民の文化遺産の継承の方法を模索した。こうして、山下氏が保管する出口座の公演音声テープ、映像資料の修復、デジタル化を遂行するに到った。

本稿は、今回修復・デジタル化された資料を解題するものである。紙幅の都合上、出口座の設立経緯の詳細と活動の概要については、山下恵子氏が尽力して執筆・編集された『阪本一房懐古展資料集』（私家版、2016年10月、関西大学図書館にも所蔵）や、機関誌『出口座』の関連記事に、そして阪本一房氏の活動の詳細は『紙芝居屋の日記：大阪＝昭和二十年代』（関西児童文化史研究会、1990年）、『大阪人形座の記録』（関西児童文化史研究会、1996年）等の成果に委ねることとして、本稿では主に修復・デジタル化された音源の作品にかんする解題と考察に焦点化することとした<sup>4)</sup>。

## 一、出口座の活動について

出口座座員は一般の人形劇愛好家であり、公務員、小学校教員、会社員、自

営業、専業主婦など、様々なバックグラウンドを持つアマチュア・メンバーが中心であり、女性が圧倒的多数を占めていた。そのため、結婚や転職、家族の転勤などで座員は頻繁に入れ替わり、座員数も増減の幅が大きかった<sup>5)</sup>。出口座のレパトリーや活動内容はマリオネットでの人形劇公演のみならず、一人芝居の創作、噺家とのコラボレーション、出口座と異なる演出の方向性を目指す内部ユニットの結成、「絵芝居」（阪本氏は「紙芝居」ではなく「絵芝居」と称した）の上演など実に多岐にわたっていたが、その背景には座長・阪本氏の旺盛な好奇心もさることながら、座員の流動性の高さも影響したと思われる。

1975年の旗揚げ以降25年間の出口座の活動を便宜的に区分すると、概ね次のように画期できる。

#### 第一期

1975年の旗揚げ後、1981年頃まで。大阪人形座の演目を継承しながら、新しい人形芝居の創作が活発に行われていた時期に当たる。毎年春と秋の2回定期公演を行っていたが、公演のたびに新作を意欲的に発表していたが、1981年に旗揚げ時の主要メンバーのが相次いで退団する。

#### 第二期

1982年から1986年頃にかけての時期。座員数は徐々に減少したが、他方で『茨木の鬼』などの一人芝居や、落語家・露の五郎氏（後に上方落語協会会長を務めることとなる二代目露の五郎兵衛氏）とのコラボレーションなど、新たな方向性が見出された。引き続き定期公演のたびに新作が上演された。定期公演の他、小学校、学童保育等の要請を受けて、定期公演以外にも出張公演積極的に行った。大阪人形座の元座員らや新メンバーが加入し再び活況を呈するが座員減少が止まらず、1986年10月公演以降4名となった。活動の一環として「絵芝居」上演活動が開始された。吹田市文化会館「メイシアター」建設にあって市に対して積極的に助言を行い、小ホールは人形劇の上映ホールとして

設計された<sup>6)</sup>。メイシアターが開業すると、日本人形劇人協会関西ブロック所属の劇団とともに積極的な人形劇公演を開始した。

### 第三期

1987年～1990年頃。1987年2月には座員が3名にまで減少するも、かつての座員や知人らが助っ人として再び公演に携わるようになり、活発な活動が継続する。1987年、メイシアターでは毎月「人形劇カーニバル」が開催され、人形劇の公演が活発化する。元座員たちも戻り始め、ふたたび活況を呈する。1988年、内部ユニット「劇団蝸牛」が発足する。

### 第四期

1991年～1995年頃。活動が多岐にわたる一方で、定期公演の在り方が大きく変化していった時期である。1991年末には本格的に「絵芝居」を研究することが『出口座』誌上で表明された<sup>7)</sup>。1992年1～5月は、毎年行われていた春秋の年二回公演ではなく、毎月1回の頻度で定期公演が行われ、出口座としての公演の他に、内部ユニット劇団蝸牛、紙芝居、スライド『せむしの子馬』上映、指使い人形による新たな演目など、多様性に富む混合的な番組で構成された。

### 第五期

1996年～2000年4月の解散まで。人形劇の上演は行われず、「絵芝居」中心の活動となった。

すでに触れた様に、出口座の定期公演は1975年の柿落としかから1991年までは基本的に毎年春と秋の2回行われた（一部の例外を除き基本的には春秋同一の番組であった）。公演は、概ね公演月の毎週日曜日、午前・午後の2回公演というパターンが多かったが、しばしば変則的であった。1979年までは、春の公

演は3月、4月の2ヶ月だったが、1980年からは4月のみとなった。1992年の最初の半年は毎月公演が行われたが、同年秋からは年4回公演となり、「絵芝居」の上演が中心となった。

人形劇の演目にかんしては、柿落とし以降1986年の『キツネのおはなはん』までは毎年出口座としての新作が披露され続けた。これ以降、出口座名義による新作は1990年初演の『ヒトデの館』まで見られなかった（定期公演演目一覧は次章を参照）。他方、1988年には時代の流れを取り入れた新しい人形芝居の方向を模索しようとする若手中心の内部ユニットが分派し<sup>8)</sup>、出口座の座員としての活動を継続しながら内部ユニット・人形劇団「蝸牛」としての活動を始め、新作の創作に取り組んだ。その後も「とまと」、「あっぷう」、「とど」などの内部ユニットが誕生した。

出口座の最大の特徴は、活動が狭義の人形劇に留まらなかったという点にある。代表の阪本氏自身が1950年代に街頭での紙芝居興行を行った経験があったことから、出口座は1996年頃からは「絵芝居」と称して紙芝居公演やオリジナル紙芝居作品の製作を展開していった。すでに触れた様に、出口座の人形芝居の多くは吹田を中心とした北摂地区の民話を題材としたものであったが、その多くは人形劇の演目のみならず、紙芝居や「かるた」といった多様なメディアへと再創作され、出口座の活動をより豊かにしていった。同時に、関西一円の公民館や市民講座において紙芝居公演の指導を行うなど、児童文化の普及にも寄与した<sup>9)</sup>。

最後に、児童文化史・庶民芸能史・文化交渉史という観点から出口座の位置を概観してみたい。日本における人形劇研究は、文楽や人形浄瑠璃に代表される古典芸能としての人形芝居研究と、児童文化の一つの形態としての人形劇研究に大別されるが、後者においては職業人形劇団とともにアマチュア人形劇団にたいしても大きな関心が注がれてきた。とりわけ、各地における児童文化の担い手としてのアマチュア人形劇団は、紙芝居とともに戦後の児童文化隆盛を大きく支えたといっても過言ではない。関西児童文化史研究会は、この視座か

ら出口座への強い関心を持ち、1989年頃より定期的な研究例会を開催していた研究例会において、出口座の設立者阪本一房氏を数度にわたって招き講演を行った。同研究会はまた、阪本氏が紙芝居興行を行っていた戦後まもなくの頃毎日記していた日記を前掲『紙芝居屋の記録』として翻刻出版したほか、阪本氏が記した「大阪人形座」（出口座の事実上の前身）の活動記録にもとづき前掲『大阪人形座の記録』が編まれた。これらは直接出口座の活動に注目したものではないものの、出口座というアマチュア人形劇団の戦後民衆芸能史・児童文化史上においてとらえる上で重要な文献である<sup>10)</sup>。出口座は教養主義を基調とする民衆的な教養のあり様を支持し、草の芽レベルにおいてそれを実践することを是としていたが<sup>11)</sup>、後章で確認するように出口座のこのような理念は設立者の阪本氏が大阪人形座時代に柏尾喜八郎、浅野孟府、小代義雄といった人形劇の先駆者たちから受け継いだものであったといえる。

## 二、出口座の公演演目について

出口座は、定期公演の他にも積極的な出張公演をこなしていた。その詳細は機関誌『出口座』に掲載されていた「出口座日誌」によってある程度把握可能である。以下は、劇場「出口座」における定期公演に焦点化した公演プログラム一覧である<sup>12)</sup>（\*は内部ユニット「劇団蝸牛」名義での上演）。

- 1975年 『カルメン』／『とけい』／『ケルト物語』／『和尚さんと小坊主』
- 1976年 『お母さんの話』／『アラジンと魔法のランプ』
- 1977年 『赤ずきん』／『三つの願い』
- 1978年 『水落とし』／『雪だるま』
- 1979年 『ざしきわらし』／『俵薬師』／『可愛い金魚』
- 1980年 『和尚さんと小坊主』／『羅城門の鬼』／(スライド)『せむしの仔馬』
- 1981年 『ロバの耳をした王子様』／『かまいたち』
- 1982年 『茨木の鬼』／『血の池』／『和尚さんと小坊主』(春)・『江戸荒物』(秋)



- 1983年 『縫戻出口手習』／『浜の真砂』
- 1984年 『小さな小さな物語』／『二魂坊』
- 1985年 『俵薬師』／『浜の真砂』
- 1986年 『キツネのおはなはん』／『雪むし』（『雪だるま』を改編）
- 1987年 『かまいたち』／『血の池』
- 1988年 『三つの願い』／『赤ずきん』
- 1989年 『浜の真砂』／『パンを踏んだ娘』\*\*
- 1990年 『梨の実』\*\*／『羅城門の鬼』／『ヒトデの館』
- 1991年 『月の光でさらしゃっさい』／『俵薬師』
- 1992年 1月：（紙芝居）「あれれのコロロ」／「蟻」／「ぐにゃぐにゃのせんとまっすくなせん」／「空中ブランコのりのキキ」／「池の緋鯉」／「月の光でさらしゃっさい」,（スライド）『せむしの子馬』
- 2月：（紙芝居）「まっすくなせんとぐにゃぐにゃのせん」／「蟻」／「空中ブランコのりのキキ」／「池の緋鯉」／「かっぱの目玉」／「新田の蛇まくら」／「月の光でさらしゃっさい」,（スライド）『せむしの子馬』
- 3月：（紙芝居）「まっすくなせんとぐにゃぐにゃのせん」／「蟻」／「空中ブランコのりのキキ」／「あめだま」／「でぐのぼう」／「池の緋鯉」／「月の光でさらしゃっさい」,（スライド）『せむしの子馬』
- 4月：（紙芝居）「ひよこちゃん」／「港についた黒んぼ」／（創作）「ガラスのこびん」／「池の緋鯉」／「あら？」／「雪わたり」,（マリオネット）『とけい』
- 5月：（紙芝居）「ひよこちゃん」／「港についた黒んぼ」／（創作）「ガラスのこびん」／「池の緋鯉」／「あら？」／「雪わたり」,（マリオネット）『とけい』
- 7月：（紙芝居）「うちにかえると」／「ニョロマ」／「ガラスの小瓶」／「池の緋鯉」／「たすけて」,（マリオネット）『カルメン』
- 10月（紙芝居）「池の緋鯉」／「死に神」／「かけら」／「パンを踏んだ娘」

／「続たすけて」, (人形芝居)『カルメン』

1993年 2月:(絵芝居)「ふうせん」／「三年とうげ」／「注文の多い料理店」／  
「ぼくはくまのままでいたかったのに」(マリオネット落語)『江戸荒  
物』

4月:(絵芝居)「百人力のお相撲産」／「雪むし」／「小女郎稲荷」／「新  
田の蛇まくら」, (絵本)「くわずにようぼう」, (人形芝居)『江戸荒物』

7月:(絵芝居)「風」／「幽霊多岐」／(絵本)「ふれふれなんだあめこ  
んなあめ」／「こんにゃろ!とうちゃん」, (人形芝居)『金の斧 銀の  
斧』／『江戸荒物』

10月:(絵芝居)「姫の送り火」／「カタラ林の方へ」／「たすけて(2)」,  
(絵本)「ぼく, お月さまとおはんしたよ」／「まっちゃんとはく」,  
(人形芝居, 指遣い人形)『女なまず』, (人形芝居, 糸操り人形)『江  
戸荒物』

1994年 2月:(絵芝居)「芝右エ門タヌキ」／「カタラ林の方へ」／「うづら」,  
(絵本)「おおはくちょうのそら」, (人形芝居, 指遣い)『女なまず  
自治会選挙の巻』, (人形芝居, 糸操り, 人形劇団蝸牛による)『カー  
連の誕生日』／『血の池』

4月:(人形芝居, 指遣い)「女なまず・2自治会選挙の巻き」, (絵芝  
居)「オッペルと象」／「カタラ林の方へ」／「続・たすけて」, (絵本の  
語り)当日のお楽しみ, (糸操り)『パンを踏んだ娘』／『血の池』

7月:(指遣い人形芝居)『いなかちゃんとかいくん』, (絵芝居)「か  
けら」／「鯨はうまい」／「午後一時の集会」／「カタラ林の方へ」／「和銅  
異聞」, (糸操り人形芝居)『パンを踏んだ娘』／『血の池』

10月:(絵芝居, 演目不詳), (マリオネット)『パンを踏んだ娘』／『血  
の池』

1995年 4月:(絵芝居)「黄金バット」, (いとあやつり)『浜の真砂』／『江戸  
荒物』

7月：(絵芝居)「三枚のおふだ」/「雷」, (ギニョール)『ヘルプ・ミー』, (マリオネット)『かまいたち』

10月：(絵芝居)「としょかんどろぼう」/「丹生山の天狗」/「藤藏まつり」/「ずっと愛して」/「雷」, (人形芝居, マリオネット)『茨木の鬼』/『ヒトデの館』

1996年 公演休止

1997年 4月：(指遣い)『なかよし』, (糸操り)『和尚さんと小坊主』, (絵芝居)「舞台転換の間」, (糸操り)『カルメン』

(「絵芝居」は紙芝居, 「糸操り」はマリオネット, 「指遣い」はギニョールによる公演を指す。)

出口座の旗揚げ直後の公演の多くは、大阪人形座の代表的な演目であった『カルメン』, 『とけい』, 『ケルト物語』, 『和尚さんと小坊主』, 『三つの願い』, 『赤ずきん』, 『お母さんの話』, 『アラジンと魔法のランプ』などを中心としていたが、1978年より吹田を中心とする北摂地域の民話や座員の創作にもとづくオリジナル演目が主流となった。吹田や北摂の民話にもとづく演目としては、『雪むし』(『雪虫』とも表記, 初演時は『雪だるま』と表記), 『俵薬師』, 『羅城門の鬼』(『茨木の鬼』), 『かまいたち』, 『血の池』, 『浜の真砂』, 『二魂坊』の7作がある。他方、座員の創作によるものとしては『水落とし』, 『可愛い金魚』, 『ロバの耳をした王子様』, 『縫戻出口手習』, 『小さな小さな物語』, 『キツネのおはなはん』がある。この他、落語家の二代目露の五郎氏(当時)とコラボレーションしたマリオネット落語『江戸荒物』や、大阪人形座時代から受け継いだスライド(幻灯)人形劇『せむしの仔馬』といった演目も代表作として挙げられるだろう。

演出上の特色としては、座長であった阪本一房氏の「茶目っ気」がにじみでる作品が多い一方で、単に子供向けの内容にとどまるのではなく、公演を通じて物議をかもすような演出も敢えて採用していた。例えば、狼に食われてし

まったままラストを迎え観客の子供たちが怖がったという『赤ずきん』、父親に連座したこどもの首が斬られてしまう物語『雪むし』などがある。出口座のモットーである「大人も子供も楽しめる人形芝居」の真髄とは、こうした演出に顕著に見られるように、全体主義や封建主義に抗う庶民の徹底した強い意志と、それによって庶民が被らざるを得なかった不条理を、主にこどもや社会的弱者のまなざしによって、しばしばユーモアと併置させて描くという立場に反映されているといえる。

### 三、出口座の公演音声資料の修復・デジタル化の経緯と過程

出口座の公演で使用された音声は、オープンリールにて録音された状態であったが、後にカセットテープへと複製された。その際、オープンリールの原版は失われている。現存するカセットテープは全29本で、うち癒着や断裂など破損しているものが3本あった。

テープに収められた演目は、旗揚げ公演直後の貴重な音源を含む、出口座の主要なレパートリーの公演時の音源の他、稽古用に用いたもの、音響のみを収めたものなどを含んでおり、全体で44タイトルが保存されていた。

修復・デジタル化にあたっては、2016年10月より、山下氏と筆者との間で音声修復にかんする打合せを電話、電子メールにて始めた。2017年3月より、音声テープの修復作業を開始し、6月に修復とデジタル化の作業が終了した。合わせて、吹田市立中央図書館所蔵の『出口座』の閲覧・複写作業にも着手した。その後『出口座』全記事目録を作成、出口座の年譜や演目の詳細についての整理を行い、本解題執筆に向けて準備を進めた。

修復作業については、外部の専門業者に依頼し、癒着や断裂などした一部カセットテープを修復後、ノイズの除去など音質を確認しながら作業を終えた。

なお、映像資料については民生機や8mmカメラにより撮影された後にVHSテープに複製したもので、およびそれらをDVD化した形態で保管されていた。音源同様、映像資料についてもオリジナルのメディアが現存しなかった

ことから画質の大幅な向上は期待できなかったが、断裂した磁気テープ部分の修復などを施し、「蝸牛」による公演も含め全11タイトルの修復、および画質調整作業を施した。

以下は、音声資料44タイトルと映像資料11タイトルの内訳である。

【音声資料】

音声資料番号	タイトル	収録テープ番号	T-23	『二魂坊』	15
T-1	『雪だるま』	1	T-24	『二魂坊』	16
T-2	『雪むし』	2	T-25	『浜の真砂』	17
T-3	『雪むし』	3	T-26	『俵薬師』	18
T-4	『紅梅狐』	3	T-27	『和尚さんと小坊主』	18
T-5	『俵薬師』	4	T-28	『和尚さんと小坊主』	19
T-6	『雪むし』	4	T-29	『江戸荒物』	20
T-7	『俵薬師』（1幕・2幕）	5	T-30	『浜の真砂』	20
T-8	『俵薬師』（3幕）	5	T-31	『春よ来い』 他童謡	21
T-9	『ごしきわらし』	5	T-32	『江戸荒物』	21
T-10	『俵薬師』	6	T-33	『江戸荒物』	22
T-11	『羅城門の鬼』	7	T-34	『茨木の鬼』	22
T-12	『羅城門の鬼』	7	T-35	『三つの願い』	23
T-13	『羅城門の鬼』	8	T-36	『三つの願い』	23
T-14	『羅城門の鬼』	9	T-37	『三つの願い』	24
T-15	『羅城門の鬼』	9	T-38	『アラジンと魔法のランプ』	
T-16	『かまいたち』	10			25
T-17	『羅城門』	10	T-39	『火の話』	26
T-18	『血の池』	11	T-40	『火の話』	26
T-19	『血の池』	12	T-41	『赤ずきん』	27
T-20	『血の池』	13	T-42	『三つの願い』	27
T-21	『魚釣り』	14	T-43	『赤ずきん』	28
T-22	『かまいたち』	14	T-44	『赤ずきん』	29

映像資料番号	タイトル	収録メディア番号
VHS-1	『俵薬師』	1
VHS-2	『月の光でさらしゃっさい』	1
VHS-3	『江戸荒物』	2
VHS-4	『ケルト物語』	3
DVD-1	『キツネのおはなはん』	4
DVD-2	『雪むし』	4
DVD-3	『かまいたち』	4
DVD-4	『血の池』	4
DVD-5	『アラジンと魔法のランプ』	5
DVD-6	『浜の真砂』	5
DVD-7	『パンを踏んだ娘』	5

#### 四、出口座の位相—残された音声・映像資料の解題

アマチュア劇団ながら、日本ウニマや日本人形劇人協会といった職業人形劇団体の会員としても積極的な活動を行ってきた出口座は、間違いなく戦後日本の人形劇文化の欠かせない一翼、とりわけ地方都市における生活に根ざした教養としての人形劇文化の振興という役割を担ったという点において特筆すべき重要な団体であった。他方、よりマクロな視座から見れば、出口座は単独の人形劇団というだけでなく、日本におけるマリオネット人形劇導入・発展史の文脈に位置づけることができる。この点から言えば、出口座のさまざまな要素は、築地小劇場より始まった日本のマリオネット人形劇史を生きたまま継承していることが確認できる（概要は後掲音声資料解題における『三つの願い』を参照されたい）。

今回修復・デジタル化された音源・映像資料によって、出口座のみならず、ルーツとなっている「人形座」、「大阪人形座」の演目、演出、人形造形などのエッセンスに触れることができることが可能となった。とりわけ、磁気テープ

29本に残された公演の音声資料には、阪本氏をはじめとする出口座座員の生き生きとしたセリフ回しのみならず、小代義雄氏、新屋英子氏、二代目露の五郎氏、森たかみち氏等、出口座ゆかりの芸術家の肉声も記録されており、鑑賞価値はもとより文芸史・芸能史の観点からも大きな価値を有している。

出口座の公演では、あらかじめセリフやサウンドを録音した磁気テープを再生し、その音声にあわせてマリオンネット演者が舞台上で人形を操作するという方式が採られていた。公演のための録音にはしばしば関西圏で広く活躍する俳優や芸人が参加した。関西芸術座の新屋英子氏（『血の池』、『三つの願い』、『ざしきわらし』、『羅城門の鬼』、『かまいたち』）、落語家の露の五郎氏（マリオンネット落語『江戸荒物』）、白井昭吾氏（人形劇団「京芸」に所属した後、フリーで人形劇、腹話術活動を継続、「吹田お話の会」会長を長く務める）、渡辺千芳氏（人形劇団「せっぽく座」座長）、大阪人形座の中心人物だった小代義雄氏（『三つの願い』）、詩人の森たかみち氏（『雪むし』）等がキャストとしてセリフを担当したこともあった。各種音声のミキシングなど録音上の技術は在阪のテレビ局に勤務するかたわら、関西芸術座の公演でも音声を担当していた吹田市在住の作本秀信氏によって全面的に支えられた。公演に際しては、関西芸術座の新屋英子氏、藤山喜子氏らによる稽古指導を受けたり、また大阪人形座の元座員・柏尾喜八郎氏（画家、阪本氏は人形芝居の「大先輩」と称した）・浅野孟府氏（彫刻家）・黒田一夫氏（大阪人形劇場に所属後、大阪人形座へ入団）や、片岡章太郎氏（本名高山三郎氏、阪本一房氏の小学校の同級生で、旅回りの大衆演劇団の看板役者として活躍）といった職業芸術家の協力を得る機会も多く、アマチュア人形劇団とはいえ極めて質の高いプログラムが提供されていたことは特筆に値するだろう。

以下、作品タイトルごとに情報を整理した上で、上記の音声及び映像資料について解題を加えたい。なお、ここでいう「初演」とは劇場・出口座における初演を意味する（『江戸荒物』のように、出口座での初演以前に出張公演や別の場所にて公演された演目は便宜上出口座の初演とはしない）。またキャス

トやスタッフの表記は『出口座』記載のものを踏襲した。

### 【音声資料解題】

#### ①『和尚さんと小坊主』

初演：1975年，再演：1980年，1982年，1997年

音声資料番号：T-27，T-28

作品解説（スチールあり）：『出口座』第1期は号（通巻3号，1975年11月）：2頁

〈スタッフ〉

作：江上フジ

表方：阪本一房

裏方：片桐正雄

〈キャスト〉

出演	声	操
和尚	阪本一房	西沢ますみ
小坊主	芦原恵子	芦原恵子
狸	石山美佐子	石山美佐子
狐	石野健治	石野健治

初演は柿落とし公演であった。もともと大阪人形座のレパトリーであり、柏木茂弥氏（大阪市文化協会常任を務める）が戦後直後に清華小学校で上演したのが大阪人形座での初演であった<sup>13)</sup>。なお、柏木氏は江上フジ氏による「ナマ原稿」を持っていた<sup>14)</sup>。小僧と、小僧に隠れて月夜に狸と戯れる和尚さんとの滑稽なやりとりを主題とした著名な民話に基づいた内容である。「和尚さん」、「小坊主」とともに大阪人形座時代の1947年に制作されたマリオネット人形が現存している。出口座の初演にあたっては「狸」の人形が新たに追加制作された。

音声資料 T-27は、1980年6月21日の「全児演」での公演のために吹き込み直したもの。T-28は同年4月の出口座での再演に際して吹き込まれたもので、



吹き込みは、1980年2月17日～3月2日に行われた。柿落とし公演とはキャストなどを総入れ替え、若手スタッフ中心の公演であった。T-27の内容とやや異なる台詞回しのバージョンが収録されている。

再演時のスタッフ、キャストは次のようにクレジットされている（この再演時の作品情報は『出口座』第2期と号（通巻56号、1980年4月）：1頁、および『出口座』第2期わ号（通巻62号、1980年10月）：2頁に掲載されている）。

〈1980年の再演時のスタッフ〉

作品解説：

作　：江上フジ

演出・音効：芦原恵子

美術：窪田みどり

人形：阪本一房

衣裳：室木紀子／工藤ひとみ

裏方：北川幸司

〈1980年の再演時のキャスト〉

人形	声	操
和尚	阪本一房	富田順子
小坊主	芦原恵子	工藤ますみ
狸　一		西沢まする
狸　二		窪田みどり
狸　三		室木紀子
影絵		室木紀子

## ②『アラジンと魔法のランプ』

初演：1976年、再演：1987年

音声資料番号：T-38

作品解説（スチールあり）：『出口座』第1期ち号（通巻8号、1976年4月）：3頁

脚色	演出：阪本一房	
照明	音効：片桐正雄	
出演：	声（大阪人形座）	操
アラジン		石山美佐子
魔法使い		阪本一房
ランプの精		石野健治
母 王様		西沢ますみ
大臣 魔法使いの弟子		芦原恵子
バズル姫		室木紀子

人形の制作は1976年2月頃。初演は1976年春公演で、上演時に用いた音源は大阪人形座時代のもので、全六幕であった<sup>15)</sup>。同年秋公演では、オイルショックを経験した世相をもちこむべく、仕立て屋を石油屋に、地下の宝物をオイル・ランプへと変更され、新たに音声の吹き込みを行っての再演であった<sup>16)</sup>。1976年秋公演のクレジットは以下の通りである（作品解説は『出口座』第1期か号（通巻14号、1976年10月）：5頁）。

〈スタッフ〉

脚色	演出：阪本一房
照明	石野健治
音効	西沢ますみ
舞監	窪田みどり

〈キャスト〉

出演：	声（テープ）	操
あらじん		石山美佐子
魔法使い		室木紀子
		芦原恵子
らんぷの精		西沢ますみ
あらじんの母		窪田みどり

王様 バズル姫

西沢ますみ

大臣 小悪魔

芦原恵子

\*声の担当者はクレジットされていない。

1987年、指つかい人形版『アラジンと魔法のランプ』全七幕として改編され、当時メシアターにて毎月開催されていた「人形劇カーニバル」の7月公演として、同年7月4日に上演された。公演用の音源は6月6日に吹き込みが行われた。現存する音声資料 T-38はこの時のものである。なお、映像資料も残っている（映像資料番号 DVD-5）。30分前後の作品が多い出口座のレパトリーの中で、ほぼ1時間の上演時間であった。内容は1976年秋公演の内容を踏襲したものであった。

1987年の指使い人形版『アラジンと魔法のランプ』のクレジットは以下の通りである。

〈スタッフ〉

作・演出 阪本一房

音楽・効果 (作本秀信)

人形・衣裳・美術・照明 片桐正雄, 高鳥公子, 須藤律子, 古矢加代

〈キャスト〉

	声	操
魔法使い	阪本一房	阪本一房
アラジン	高鳥公子	高鳥公子
母親	須藤律子	(山下恵子)
バズル姫	高鳥公子	高鳥公子
ランプの精	片桐正雄	片桐正雄
指輪の精	須藤律子	(山下恵子)
王様	妹尾泰治	高鳥公子

③『赤ずきん』

初演：1977年，再演：1988年

音声資料番号：T-41， T-43， T-44

作品紹介（スチールあり）：『出口座』第1期つ号（通巻19号）：2～3頁／『出口座』第1期ね号（通巻20号，1977年4月）：2頁／『出口座』第1期の号（通巻26号，1977年10月）：2頁

作 演出：阪本一房

舞台美術：佐方和久

照明：小林敏樹

音楽効果：作本秀信

道具：黒田一夫

舞監：石野健治

出演： 操

赤ずきん 室木紀子

母親 窪田みどり

狼 芦原恵子

猟師 石野健治（声） 西沢まする

老婆 石山美佐子

兎 室木紀子 石山美佐子

全三幕から構成された。1976年12月から翌1977年1月にかけてマリオネット制作，背景描写は1977年1月，神戸の佐方和久氏による。音声吹き込みにかんする記録は無い。同年9月，秋公演に向けて改編がほどこされ，公演用音声も9月に録音がり直しされたと記録されている。山下恵子氏によれば，T-41，T-43，T-44はいずれも1977年9月に吹き込まれた音源をもとにしており，T-43とT-44は1988年に再演された際に挨拶を入れて再編集した音源である。再演時のクレジットは以下の通り。

〈スタッフ〉

作 演出 人形 美術 阪本一房  
音楽 音響効果 作本秀信  
照明 舞台監督 片桐正雄

〈キャスト〉

人形	声	操
赤ずきん	山地みどり	高鳥公子, 須藤律子
母親	室木紀子	阪本一房
獵師	阪本一房	須藤律子, 高鳥公子
老婆	広井ますゐ	高鳥公子
狼	山下恵子	阪本一房
兎		須藤律子

なお、初演、再演ともに同一の演者が声を担当した。

④『三つの願い』

初演：1977年，再演：1988年

音声資料番号：T-35, 36, 37, 42

作品紹介（スチールあり）：『出口座』第1期つ号（通巻19号）：4～5頁／『出口座』第1期ね号（通巻20号，1977年4月）：3頁／『出口座』第1期の号（通巻26号，1977年10月）：3頁

〈スタッフ〉

作：小山内薫  
演出：小代義雄  
美術：柏尾喜八郎  
照明：小林敏樹  
音効：作本秀信  
舞監：阪本一房 石野健治

〈キャスト〉

出演：	声	操
マルチン	小代義雄	芦原恵子
マルガレット	新屋英子	西沢ますみ
カスパル	阪本一房	室木紀子
小仙女	木村満子	石山美佐子
犬・兎		窪田みどり

二幕構成。日本の近代人形劇史にとって重要な作品であり、出口座のこの演目はその「直系」というべきものである。1920年代、日本ではにわかに入形劇団が急増し、大正期新興美術運動の一翼をになっていた。「人形座」もこうした流れの中に設立された東京の劇団で、舞台装置家の伊藤熹朗・智子夫妻、弟の千田是也らを中心に、美術、演劇、音楽に従事していた賛同者らによって設立された<sup>17)</sup>。出口座ゆかりの音楽家で、大阪音楽大学で教鞭を執っていた小代義雄氏も、その一人である。「人形座」の最も初期のレパトリーの一つに『三つの願ひ』があるが、その公演は1927年2月、まず大阪と神戸の「松竹座」で演じられ、同年7月以降に東京で何回か上演された。滝沢恭司の調査によればこれらの公演において小代氏が関わったことは確認できないものの、その他の公演では人形の声や音楽担当として「小代良夫」としてクレジットされているのが見える<sup>18)</sup>。1930年代、小代氏が大阪音楽学校（現大阪音楽大学）で教壇に立つために来阪したことを契機として、彫刻家の浅野孟府氏や画家の野田博太郎氏、柏尾喜八郎氏らとともに「大阪人形座」が立ちあげられた。戦時下では活動を休止していたものの、戦後に活動を再開する。その際、戦後新劇「感動派」で活動していた阪本一房氏が人形座へ加わったのであった。「マルチン」、「マルガレット」、「カスパル」の各マリオネットは、大阪人形座時代の1949年に制作されたものが現存している。東京の「人形座」で用いられた人形の写真資料からは、「人形座」のマリオネット造形のエッセンスが、大阪人形座を経て出口座へと着実に継承されていることがはっきりと確認できる。

ペローの著名な童話にもとづく内容で、100年間木の中に閉じ込められた仙女を助けたお礼に願いを三つかなえてもらえることになったマルチンが、たわいもない願いでそのチャンスを全て使ってしまうという滑稽話。

出口座での初演の際、「マルチン」役に小代義雄氏を、「マルガレット」役に関西芸術座の新屋英子氏を、仙女に大阪人形座座員の木村満子氏を迎え、公演用テープの吹き込みが行われた。録音は1977年2月に実施された。吹き込みの様子は、「マルガレット」役として参加した関西芸術座・新屋英子氏による回想「「赤ずきん」と「三つの願い」」『出口座』第4期ほ号、通巻152号（1988年4月、初出は『演劇通信』第34号、1977年）に詳しい。

音声資料の詳細は次の通りである。T-35＝セリフと音楽、効果音が入った公演全体を収録したもの。T-36＝セリフと音楽、効果音が入った公演全体を収録したもの、T-35と同一のものだと思われる。T-37＝セリフと音楽、効果音が入った公演全体を収録したもの、T-35と同一のものだと思われるが、T-36＝よりも若干スピードが遅く編集されており、冒頭にマイクテストの音声も入り込んでいる。T-42＝セリフのみが収録されている。

1988年の再演時のクレジットは以下の通り。

〈スタッフ〉

作	小山内薫
演出	阪本一房
音楽 音響効果	作本秀信
美術	柏尾喜八郎
照明 付帯監督	片桐正雄

〈キャスト〉

人形	声	操
マルチン	小代義雄	阪本一房
マルガレット	新屋英子	高鳥公子
ガスパル	阪本一房	阪本一房, 須藤律子

小仙女

木村満子

須藤律子，阪本一房，高鳥公子

⑤『雪むし』（『雪虫』とも表記，初演時は『雪だるま』）

初演：1978年，再演：1986年

音声資料番号：T-1，T-2，T-3，T-6

作品解説：『出口座』第1期け号（通巻31号，1978年3月）：4～5頁／『出口座』

第1期ふ号（通巻32号，1978年4月）：3頁

〈スタッフ〉

作・演出 阪本一房

音効：作本秀信

詩・その曲：森たかみち

道具：黒田一夫

舞監：北川幸司

〈キャスト〉

藤蔵（百姓） 白井昭伍

きぬ（女房） 室木紀子

松吉（子ども） 窪田みどり

竹三（友だち） 芦原恵子

うめ（友だち） 西沢ますゐ

彌作（百姓） 森たかみち

かめ（百姓女） 芦原恵子

ちか（百姓女） 窪田みどり

弁慶（上役人） 片岡章太郎

役人一 阪本一房

役人二 北川幸司

吹田・中ン谷村（現在の千里ニュータウン）を舞台に，役人に抗った百姓一家が雪の日に打ち首になるという吹田民話を，子どもの目線から編んだ演目。



公演用の音声は、1978年1月29日に吹き込み、3月2日音入れ、6月11日に再編集が行われた。出口座ゆかりの詩人森たかみち氏作詞作曲の童謡『雪虫』が挿入された。1986年の再演時にタイトルが『雪むし』へと改められて上演された。山下恵子氏編『阪本一房懐古展資料集』には、森たかみち氏による手稿楽譜『雪虫』と、阪本一房氏『雪むし』手稿原稿の一部が資料として掲載されている(11頁)。音源資料の内訳は次の通り。T-1=1978年の初演時の公演用音源(セリフのみ)、T-2は、初演時公演用音源をダビングしたもの。T-3は、1986年に初演時の音源をダビングしたもの。T-6は、1990年以降に初演時の音源をダビングしたもの。

⑥『俵薬師』

初演：1979年、再演：1985年、1991年

音声資料番号：T-5、T-7、T-8、T-10、T-26

作品解説：『出口座』第1期㉗号(通巻43号、1979年3月)：2～3頁／『出口座』

第1期ひ号(通巻44号、1979年4月)：3頁／『出口座』第2期い号(通巻50号、

1979年10月)：3頁

〈スタッフ〉

作・演出・人形・美術：阪本一房

音楽効果：(作本秀信)

人形衣裳：室木紀子 工藤ひとみ

裏方：北川幸司

〈キャスト〉

	声	操
旦那	(片岡章太郎)	芦原恵子

(十月公演では窪田みどり 室木紀子)

茂平	(臼井昭伍)	西沢まする
----	--------	-------

盲	阪本一房	室木紀子
---	------	------

ふく 窪田みどり 窪田みどり

うめ 西沢ますゐ 西沢ますゐ

竹三 芦原恵子 芦原恵子 室木紀子

（十月公演では西沢ますゐ 工藤紀子）

俵・地蔵

工藤ひとみ

吹田を舞台にした民話にもとづき、阪本氏が編んだ演目。「うそつき茂平」が周囲の人々を必死にだまそうと試みる滑稽劇。普段は写実的な背景を用いる出口座の演出であったが、『俵薬師』での舞台背景は滑稽味を演出するため、抽象度の高い「シユールな仕上がり」のものを用いた<sup>19)</sup>。同作は、1979年8月、国際人形劇連盟「ユニマ」の創立50周年を記念して開催されたアジア・太平洋国際人形劇祭典で上演され、国際審査委員団賞を受賞した<sup>20)</sup>。

公演用の音声は1979年1月30日に吹き込みが行われたが、4月までに何度か取り直しが行われた。BGMの尺八演奏録音は辻心堂氏によるもので、2月10日に録音が行われた。

音源資料の内訳は次の通り。T-5 = T-10を1990年以降ダビングしたもの。T-7 = 初演にそなえて1979年2月10日に録音されたセリフのみの音源。第一幕、第二幕を収録。T-8 = 録音時期はT-7に同じ、第三幕を収録。T-10 = 1985年の再演時の音源。第一場から第二場への転換の際の演出が改編された。T-26 = 1979年の初演時の音源。同年2月に効果音が、3月、4月にセリフが録音された。

### ⑦『ざしきわらし』

初演：1979年

音声資料番号：T-9

作品解説：『出口座』第1期㉘号（通巻43号1979年3月）：4～5頁／『出口座』第1期ひ号（通巻44号、1979年4月）：1頁／『出口座』第2期い号（通巻50号、1979年10月）：2頁

〈スタッフ〉

作：西沢まする

演出：阪本一房

音効：(作本秀信)

人形：芦原恵子

美術：窪田みどり

衣裳：室木紀子 工藤ひとみ

裏方：北川幸司

〈キャスト〉

	声	操
ざしきわらし	西沢まする	西沢まする
婆	(新屋英子)	芦原恵子
耕作	芦原恵子	室木紀子
梅太	北川幸司	窪田みどり
はつ	工藤ひとみ	西沢まする 芦原恵子

出口座オリジナル作品である。関西芸術座・新屋英子氏を迎えての演出であった。新屋氏は、1976年よりしばしば出口座に向いて座員たちの演技指導に熱心に協力していたことが「出口座日誌」（機関誌『出口座』に連載）より伺い知ることができる。新家氏の録音部分は1979年2月15日に第一場、同16日に第二、三場が吹き込まれた。

音源資料 T-9 はセリフのみ収録したものである。

⑧『羅城門の鬼』

初演：1980年、再演：1990年

音源資料番号：T-11, T-12, T-13, T-14, T-15, T-17

作品解説：『出口座』第2期と号（通巻56号，1980年4月）：3頁／『出口座』

第2期わ号（通巻62号，1980年10月）：4頁

〈スタッフ〉

作・演出・美術：阪本一房

音楽効果：作本秀信

衣裳：室木紀子

裏方：北川幸司（秋の公演（十月）では前川士郎氏へ変更）

〈キャスト〉

	声	操
鬼の子	阪本一房	芦原恵子
うめ	西沢ますゐ	西沢ますゐ
竹三	芦原恵子	工藤ひとみ
ちか	窪田みどり	窪田みどり
弥作	北川幸司	室木紀子
老婆	新屋英子	室木紀子
公家	工藤ひとみ	窪田みどり
渡辺綱	片岡章太郎	西沢ますゐ
鬼の首		富田順子
鬼の腕		工藤ひとみ

茨木に伝わる著名な民話にもとづいて創作された演目。1979年に阪本一房氏が一人芝居『茨木の鬼』として発表した演目を出口座の人形芝居用に脚色しなおした作品である（詳細は下掲『一人芝居 茨木の鬼』参照）。茨木の百姓の家に生まれた暴れん坊の男児が村八分にされた末に京の羅城門へと辿り着き、老婆とともにひっそりと暮らすことになったが、意地の悪い公家によって老婆との生活を邪魔され、抵抗のため立ち上がる物語。録音は1980年3月下旬に行われた。なお、本作の製作経過は山下恵子氏によってまとめられている<sup>21)</sup>。

音声資料の内訳は次の通り。T-11 = 1990年の改編時に様々な演出を試験的に施したもの。オープニングの歌やセリフを一部カットしたり、ラストも改編

された。T-12=T-11の複製。T-13=1990年の再演時の公演用音源、全二場で構成された。T-14=冒頭に「和尚さんと小坊主」の歌唱が残存。『羅城門の鬼』の鬼のセリフ部分と効果音を収録。T-15=1980年の初演時の公演用音源。全三場で構成された。T-17=T-13を保存用にダビングしたもの。

⑨一人芝居『茨木の鬼』

初演：1982年，再演：1982年，1995年

音声資料番号：T-34

作品紹介：『出口座』第2期け号（通巻80号，1982年4月）：3頁／『出口座』第2期さ号（通巻86号，1981年10月）：1頁

〈スタッフ〉

作 演出 美術 阪本一房

音効 作本秀信

照明 舞監 片桐正雄

〈キャスト〉

語り 操り 阪本一房

介添 高鳥公子

岡戸公子

芦田裕子

遠藤裕子

八二・秋の公演でのクレジットは以下のように変更されている。

作・裏方 阪本一房

裏方 片桐正雄

音効 作本秀信

でてくる人形 村人，鬼の母親，鬼，公家，頼光，渡辺の綱

操り 阪本一房

介添 高鳥公子，岡戸公子

1979年7月8日、百貨店「阪急ファイブ」の「オレンジルーム」において行われた「人形ヴォードビル ひとり芸の饗宴」にて披露された。この時の参加者は、出口座の阪本氏の他に、人形劇団「クラルテ」の松本則子氏、「みのむし」飯室康一氏、「京芸」谷ひろし氏、「カルパ」の若林茂子氏、「トロッコ」の瀧見秀明氏、「ゆりかご」の家田隆現氏という関西一円の名だたる人形劇団のトップが参集した。文字通りの「饗宴」であったといえる。この時の公演用の吹き込みは1979年7月3日、6日に行われた。その後1982年の出口座での初演に際しては音効担当作本秀信氏によってテーマ曲が挿入された。音声資料 T-34は1982年の再演時の音源。

⑩『かまいたち』

初演：1981年，再演：1987年，1995年

音声資料番号：T-16，T-22

作品介绍：『出口座』第2期そ号（通巻67号，1981年4月）：1～2頁／『出口座』

第2期み号（通巻74号，1981年10月）：3頁

〈スタッフ〉

作・演出・美術・照明 阪本一房

音楽・効果 作本秀信

人形衣裳 室木紀子，他一同

舞台監督 窪田みどり

〈キャスト〉

	音声	操
弥平	白井昭伍	西沢まする
いね	浅井加代子	室木紀子
竹三	芦原恵子	富田順子（秋公演では操りは工藤ひとみ）
うめ	西沢まする	浅井加代子
鎌鼬の声	富田順子	

憲兵 阪本一房 工藤ひとみ  
和尚 片岡章太郎 前川士郎（秋公演では操りは阪本一房）

明治末を舞台とした、吹田民話の中でも比較的新しい主題の内容である。徴兵に反対し、それを拒む術を思案した弥平が、吹田・高浜神社の境内でふと「かまいたち」に見舞われたことにして自傷することを思いつく。それでも弥平を招集しようとする憲兵を、弥平の妻で「屁こき姉さ」のいねが、放屁で吹き飛ばしてしまうという筋書きである。

公演用音声テープは、1980年12月～翌2月に吹き込みが行われた。現存する音声資料はT-16=T-22を保存用にダビングしたもの。T-22=セリフと音響が収録された初演時の公演用音源。なお、この演目は阪本氏による手稿原稿が残されている。

#### ⑪『血の池』

初演：1982年，再演：1987年，1994年

音声資料番号：T-18，T-19，T-20

作品紹介：『出口座』第2期さ号（通巻86号，1981年10月）：3頁

〈スタッフ〉

作 演出 美術 阪本一房

音効 作本秀信

照明 舞監 片桐正雄

（八二・十月公演では「衣裳 藤本幸子」が追加された）

〈キャスト〉

語り

景清 村の男 阪本一房

大日坊能忍 片岡章太郎

婆 新屋英子

操り

阪本一房

介添

高鳥公子／岡戸公子／芦田裕子

八二・十月公演では以下のようにクレジットされている。

人形	声	操り
大日坊能忍	片岡章太郎	高鳥公子
老婆	新屋英子	岡戸公子
平景清	阪本一房	阪本一房
村人	阪本一房	阪本一房
首	阪本一房	岡戸公子

吹田村の川面地区を舞台にした民話。舞台となった池は現在の吹田内本町3丁目13番地の「泪池」とされている（現在は「泪之池遊園」となっている）。池のほとりにあった大日坊の祠にまつわる民話。池の側に住んでいた和尚・大日坊の所に、平家の武将・平景清が落ち逃げてきた。大日坊はこれをかくまうも、景清は大日坊に命を狙われていると勘違いし、首を切ってしまう。その血で池は真っ赤に染まり「血の池」となった。景清は村人たちに責められ、深く後悔する。しばしば池にやってきては、自らの過ちを悔いて泪したことから、「血の池」は「泪池」と呼ばれるようになった。

録音・ミキシングは1982年3月に実施。T-18, T-19, T-20はすべて同内容であり、T-18がマザー音源で、他は保存用に複製したもの。

## ⑫『江戸荒物』

初演：1982年，再演：1993年，1995年

音声資料番号：T-29, T-32, T-33

作品紹介：『出口座』第2期さ号（通巻86号，1981年10月）：2頁



〈スタッフ〉

落語 露乃五郎（表記は当時のママ）

表方 阪本一房

裏方 片桐正雄

〈キャスト〉

でてくる人形 隠居, きい公, 女房, まちん人, 江戸っ子, おなごし  
操り 阪本一房, 岡戸公子, 高鳥公子

上方落語『江戸荒物』にマリオネットをコラボレーションさせた作品である。初演は1979年1月6日、阪急ファイブのイベント・スペース「オレンジルーム」にて開催された「露の五郎事始め」公演であった。「露の五郎」とは噺家・二代目露の五郎兵衛氏の当時の芸名であった。1982年10月30日に西宮市民会館での「市民文化祭」において再上演され、その直後の出口座十月公演の演目として公演された。

音声資料 T-29, T-32, T-33はいずれも噺家の露の五郎氏が吹き込んだもの。T-33は1978年9月7日、露の氏が出口座に来座し録音した音源。山下恵子氏によれば、マリオネットは糸で操るため、落語の語りの速度に人形の動きを連動させることが困難であった。そのため、公演では落語の音声をスローダウンする加工を施し演じた。T-29はT-33の速度を下げた公演用音源。T-32はT-29をダビングしたもの。

### ⑬『浜の真砂』

初演：1983年，再演：1985年，1989年，1995年

音声資料番号：T-25, T-30

作品紹介：『出口座』第2期え号（通巻92号，1983年4月）：2～3頁（『出口座』第2期京号（通巻98号，1983年10月）にも同内容の紹介が掲載）

〈スタッフ〉

作 演出 美術 阪本一房

音効	(作本秀信)	
照明 舞監	片桐正雄	
衣裳	藤本幸子	
大正琴	(森たかみち)	
〈キャスト〉		
人形	声	操
えんま	片岡章太郎	黒田一夫
川島よし子	小谷松恵理子	岡戸公子
赤おに	白井昭伍	岡戸公子
青おに	阪本一房	高鳥公子
かんのんぼさつ	高鳥公子	高鳥公子
かねの亡者	白井昭伍	阪本一房
石川五右衛門	阪本一房	阪本一房
花びら, 骨たち	一同	一同

脚本が完成したのが公演まで1ヶ月余りの2月24日のことであった。落語「地獄八景亡者の戯れ」から着想を得て創作されたものである。亡者として石川五右衛門や川島芳子を登場させるなど、阪本氏の茶目っ気が反映された作品だといえる。音声資料 T-25, T-30はともにセリフとBGMが吹き込まれているが、T-25の冒頭には阪本一房氏の挨拶が吹き込まれており、公演で用いられたもの。吹き込みは公演直前の1983年3月頃か。T-30はT-25を1995年にダビングしたもの。

#### ⑭『二魂坊』

初演：1984年

音声資料番号：T-21, T-23, T-24

作品紹介：『出口座』第3期6（幣）号（通巻104号，1984年4月）：2～3頁  
／『出口座』第3期（通巻110号，1984年10月）：2頁

〈キャスト〉

作・演出・人形美術	阪本一房
音楽・効果	(作本秀信)
人形衣裳	藤本幸子・小林静子
舞監・裏方	片桐正雄

〈キャスト〉

人形	声	操
日光坊	(片岡章太郎)	黒田一夫
月光坊	(臼井昭伍)	阪本一房
村人	阪本一房	阪本一房
竹三	荒山裕美	土岐妙子
うめ	小林菜央	高鳥公子
巫女	高鳥公子	高鳥公子

一場「村の道」、二場「日光坊・月光坊の家の前」から構成される。阪本氏の手稿原稿表紙に、吹田の高浜神社にまつわる民話『二魂坊の火』、同じく吹田の民話『吹田殿』、『紅梅狐』にもとづいた編んだ創作芝居というメモが残されている<sup>22)</sup>。

吹田・三国側沿いの別送で放蕩三昧の公家にこき使われて体を痛めた弥助は、日光坊と月光坊という祈祷師のもとへ行くが叶わない。そこに、公家の別荘建設のさいに祠をこわされ怒った狐が巫女の姿の紅梅狐となって恨みを果たそうとする。

録音時期は不明だが、概ね1984年初春頃だと思われる。T-21はセリフのみ、T-23はBGMのみ収録している。山下恵子氏によれば、この演目は出口座旗揚げ当初よりレパトリーとすべく阪本氏より提案がなされていたものの、登場人物日光坊と月光坊が互いの首を斬り合って頭部が入替わるという大掛かりな演出だったため、見送られたという経緯があった。T-24はカセットテープの磁気テープ部分が癒着していたが修復をほどこし復元したもので、セリフ

とBGM、効果音が入った完全版である。録音時期は不明だが、いずれも初演に際して吹き込まれた音源である。

### ⑮『火の話』

音声資料番号：T-39, T-40

大阪人形座時代のレパトリーを改編したもの。出口座定期公演で演じられたものではなく、出張公演で用いられた指使い人形劇（ギニョール）である。1983年12月にギニョール版「火の話」が青山文庫にて出張上演された記録が残されており、音声資料 T-39, T-40ともに録音はこの頃だと推測される。T-39は音響が無いため試作版だと思われる。

大阪人形座時代の1948年に制作された指使い人形が現存している。音楽は小代義雄氏が作曲した<sup>23)</sup>。1954年には映画化され、『クロチャンのいたずら』として上映されていたが、フィルムは現存していない。撮影にはアンスコカラー16ミリ1巻が用いられた。映画版の詳細は以下の通りである。

作品解説：『出口座』第1期は号（通巻3号，1975年11月）：5頁

制作：大阪人形座

協賛：近畿広告株式会社 中野孝夫

演出：野田博太郎

美術：柏尾喜八郎

撮影：野村都喜男

原作：阪本一房

出演： 声 操

シロチャン 柴山冷子 阪本・松沢・黒田一夫の三名

クロチャン 平井猛

モンチャン 山田亮照

火の精 松沢喬士

梟 阪本一房

⑩紅梅狐

音声資料番号：T-4

詳細は不明。若干のBGMを伴う。『二魂坊』の主題の一つとなった『紅梅狐』を、阪本氏が16分程度の一人語りで演じたもの。吹田市立中央図書館での一人芝居公演（1984年12月20日）で用いられた音源で、録音は1984年10月頃か。

⑰魚釣り

音声資料番号：T-23

作品解説：『出口座』第4期さ号（通巻184号，1990年12月）：2

1990年11月21日，メシアターで演じられた無言劇。効果音のみ収録。

【映像資料解題】

①『キツネのおはなはん』（『きつねのおはなはん』とも）／映像資料番号：DVD-1／収録メディア番号：4

②『雪むし』／映像資料番号：DVD-2／収録メディア番号：4

いずれも1986年の公演を記録したもの。DVDで保存されており、オリジナルがどのように撮影されたのかは不詳。①『キツネのおはなはん』は、京都女子大で教鞭をとっておられた中川正文氏による絵本を原作としたもので、三場構成であった。1986年初演。

〈スタッフ〉

脚色	高鳥公子
演出	阪本一房
音効	(作本秀信)
人形・美術	ふるた加代，山下恵子，山地みどり
詩・曲	柿本香苗
照明・舞監	片桐正雄

〈キャスト〉

	声	操
おはなはん	高鳥公子	高鳥公子
看護婦	高鳥公子	
おたみ	中村みどり	福山玲子
まんけはん	(白井昭吾)	阪本一房
医者	阪本一房	中村みどり
和尚	(片岡章太郎)	高鳥公子

ハイカラな娘に化けるのが得意な狐に、まんけはんが自分の娘のおたみをハイカラにしてもらおうとする物語である。②『雪むし』については音声資料解題の『雪むし』を参照。

③『かまいたち』／映像資料番号：DVD-3／収録メディア番号：4

④『血の池』／映像資料番号：DVD-4／収録メディア番号：4

いずれも1987年の再演時の舞台を収める。詳細は音声資料解題の『かまいたち』、『血の池』の項目を参照されたい。

⑤『アラジンと魔法のランプ』／映像資料番号：DVD-5／収録メディア番号：5

詳細は音声資料解題の『アラジンと魔法のランプ』を参照されたい。この映像は1987年7月に吹田市文化会館「メシアター」で開催された人形劇カーニバルでの公演の様子を記録したもの。

⑥『浜の真砂』／映像資料番号：DVD-6／収録メディア番号：5

⑦『パンを踏んだ娘』／映像資料番号：DVD-7／収録メディア番号：5

1989年4月公演を記録したものと思われる。⑩『浜の真砂』は音声資料解題の当該項目を参照。⑦『パンを踏んだ娘』は出口座内部ユニット・人形劇団蝸牛名義での公演で、これが初演、再演は翌年に1度行われた。三幕構成。映

像の末尾には、講演後、観客と懇談する様子もわずかに記録されており、芝居小屋内部の様子をうかがうことができる。『出口座』第4期れ号（通巻164号、1989年4月）に高鳥公子氏による解説が寄せられている。パンの上を歩こうとしたインゲルが沼におとされ化け物たちにいじめられ、母によって助けられた後に鳥となって自由となる、という筋書きである。

〈スタッフ〉

表方	高鳥公子，阪本一房
音効	(作本秀信)
詩・曲	柿本香苗
裏方	ふるた加代，中村明子，藤原房子

〈キャスト〉

	声	操
インゲル	高鳥公子	福山玲子
女主人	辻田之子	高鳥公子
母親	(黒川悦子)	須藤律子
沼の女ヘドロ	阪本一房	高鳥公子
シドロ	中村明子	須藤律子
モドロ	ふるた加代	藤原房子
蛇・猫・鳥		一同

\*秋公演では蛇=ふるた加代，猫=中村明子とクレジットされている。

⑧『俵薬師』／映像資料番号：VHS-1／収録メディア整理番号：1

⑨『月の光でさらしゃっさい』／映像資料番号：VHS-2／収録メディア番号：1

①，②ともに1991年4月14日，同年春公演を収めたものである。①『俵薬師』については音声資料解題を参照されたい。②『月の光でさらしゃっさい』は，座員の高鳥公子氏が1987年8月に阪本氏主催の「お話の会」にて披露した語り物を原作としたもので，氏の出身である東北地方の男女の物語である<sup>24)</sup>。1991

年初演，翌年3度にわたって再演。作品の詳細は『出口座』第4期こ号（通巻180号，1990年8月）6頁，同第4期し号（通巻188号，1991年4月）1頁に掲載。

〈スタッフ〉

作	（津谷タズ子）
制作・語り	高鳥公子
音響・効果	作本秀信
人形	ふるた加代
装置	中村明子，藤原房子
照明	植田由喜子

〈キャスト〉

娘	山下恵子
語りの婆／沼の婆・蝶	高鳥公子
婿／家・影絵	藤原房子
林・繭	中村明子

⑩ 『江戸荒物』／映像資料番号：VHS-3／収録メディア番号：2

詳細は音声資料解題の『江戸荒物』の項目を参照されたい。映像は1993年10月10日の公演の午前中に行われたリハーサルを収録したものである。

⑪ 『ケルト物語』／映像資料番号：VHS-4／収録メディア番号：3

阪本一房氏がTV出演した際に，画面を8mmで写し撮った後に，VHSに落としたもの。記録した時期は不詳。音声は無く，画質なども良好ではない。

『ケルト物語』は，大阪人形座のレパートリーで，出口座の柿落とし公演でも上演された。ジャワの海辺に住む10才のケルトが大人と一緒に海へ出て魚を獲ようとする。



〈スタッフ〉

作	小出正吾
表方	阪本一房
裏方	片桐正雄

〈キャスト〉

出演	声	操
ケルト	柴山冷子	芦原恵子
パク・ミアム	松沢喬士	西沢ますみ
石のお爺さん	阪本一房	石山美佐子
蛸		石野健治
トカゲ (ケルト)		芦原恵子
トカゲ (パク・ミアム)		西沢ますみ

『出口座』第1期は号(通巻3号, 1975年11月)にステイルが掲載されている他, 第1期み号(通巻25号, 1977年9月)表紙には「お爺さん」のマリオネット人形の写真が採用されている。この人形は大阪人形座時代の1952年に制作されたものであった。

おわりに

公演音声は修復されたことで、出口座記念行事はますます多様な形態で展開されるようになった。2017年10月21日、22日に吹田歴史文化街作りセンター「浜屋敷」で開催された「阪本一房と吹田の民話と人形劇」(吹田市文化振興事業団主催)では、本プロジェクトで修復・画質改善された映像資料が上映された<sup>25)</sup>。また、2018年12月1日には出口座ゆかりの「メイシアター」小ホールで「阪本一房生誕100年記念公演」(吹田市文化振興事業団主催)が開催され、本プロジェクトが修復、デジタル化した音源を用いて『江戸荒物』、『血の池』が公演された。すでに存在しない劇団となった出口座ではあるが、このような活

動によってその資料が広く知られ、また活用されることによって、郷土に生きる人々をつなぎ、人形劇を契機としたあらたな文化活動の糸口となることが期待される。特に、マリオネットはギニョールと呼ばれる指使い人形以上に演じ方の技術が求められるため、演じ手の要請や技術継承が現状における最も大きな課題である。展示や上演活動の鑑賞を通じて現存する出口座の資料を活用したいと思う市民との繋がりを形成し、それを継承してゆく文化の循環の構築と継続に期待したい。

- \*本研究は、2016年度～2017年度関西大学研究拠点形成支援経費において、研究課題「地域文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」として研究費を受け、その成果を公表するものである。
- \*出口座元座員・山下恵子氏には、貴重な資料を多数参照させていただきありがとうございました。常に惜しみないご助言をくださり執筆を支えてくださいました。また、山下氏の編まれた『阪本一房懐古展資料集』が無ければ、本解題の執筆は出来なかった。機関誌『出口座』の閲覧・複写の際には吹田市中心図書館館長西尾さよ子氏、参事宮東里花氏に多大な協力を賜った。複写作業にあたっては、社会的信頼システム創生センター RA の中島小巻氏・坂本美樹氏（いずれも当時）、関西大学大学院修士課程修了生山本悠一氏・胡言氏（現京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）に全面的に協力していただいた。音源のデジタル化にあたってはRA 中島小巻氏（当時）の全面的な協力を賜った。関西における人形劇の活動については、人形劇団「クラルテ」、人形劇団「京芸」（制作部・石川幹洋氏）、人形劇「トロッコ」・人形劇図書館の湯見英明氏に貴重な助言を賜った。本稿執筆にご協力いただいた皆様に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

## 注

- 1) 阪本一房「吹田人形劇研究会（一）」『出口座』第1期い号（創刊号，1975年9月），4～5頁。
- 2) 「『出口座』六期を終えて」『出口座』第7期，292号（2000年1月）。山下恵子「人形芝居出口座」、『阪本一房懐古展資料集』，7頁。
- 3) 出口座一同「出口座のこと」『出口座』第1期ろ号（通巻2号，1975年10月），表紙裏～1頁。
- 4) この他、関西・大阪にかんする人形劇運動にかんしては次の各文献も参照されたい。芳川雅勇「現代人形劇史 大阪に於ける人形現代演劇運動の軌跡（一）」『日本人形劇人』

第69号(1999年10月15日)、8～10頁、および同「現代人形劇史 大阪に於ける人形現代演劇運動の軌跡(二)」『日本人形劇人』第73号(2001年2月20日)、7～9頁。『上方芸能』第139号(2001年3月)の特集「街にも広がる現代人形劇」では、次のような文献が収録されている。長谷川正明「翼賛体制下 苦渋の若き芸術家たち：戦前・戦中の現代人形劇」、芳川雅勇「新時代の人形劇想像をめざして：戦後関西のあゆみ」、松本則子「自由な時空へはばたけ！：現代人形劇の現状と展望」、久保田ひさ子・谷ひろし・松本則子・芳川雅勇「座談会 関西人形劇会の歩みと今世紀の展望」等。

- 5) 座員数は旗揚げ後7年間程度は10名強で安定していたが、1982年には概ね半減する。その後、大阪人形座の元座員や新メンバーを迎えて7名程度まで回復するが、1986年秋以降は座員のやむを得ない事情での退団が相次ぎ、1987年1月には3名にまで激減する。1989年頃より、一端退団した座員たちが再入団したり、内部ユニットを結成するなどして再び10名程度にまで回復した。
- 6) 『出口座』にはその時の様子を記した記事が多数見られる。人形劇用ホールとしてメイシアター小ホールを紹介したものには次の文献がある。「公共ホールのパイオニア メイシアター(特集：街にも広がる現代人形劇)」『上方芸能』第139号(2001年3月)31頁。
- 7) 1995年2月には機関誌『出口座』上で、人形芝居を継続するか、絵芝居に専念するかの間で迷っていることが吐露され、翌年以降絵芝居を中心とする活動が開始されることになった。
- 8) 阪本氏は出口座の作風を「土臭くて人形自体もじゃがいもみたい」と称しつつ、若手の新しい流れを歓迎していた(阪本一房「「蝸牛」の行方」『出口座』第4期そ号、通巻165号、1989年5月、4頁)。
- 9) 阪本氏の紙芝居製作についてのノウハウの一端は、阪本一房・堀田穰『紙芝居を作ろう!』(青弓社、1995)に収められている。
- 10) 紙幅の都合上本稿では詳細を割愛せざるを得なかったが、機関誌『出口座』の重要性については強調しておきたい。アマチュアであるにもかかわらず、25年という長期にわたって月刊誌を発行してきた劇団は他に類を見ないであろう。機関誌『出口座』には座員の創作やエッセイのみならず、出口座の詳細な活動日誌や、出口座の前身にあたる大阪人形座の成立と活動の詳細を記した回想録「大阪人形座の記録」(連載)などの劇団活動の網羅的な記録に加え、1970年代から1980年代にかけて盛んに行われた国内外の人形劇団の関西公演の劇評や関係者との交流記も多数掲載されており、戦後の日本と世界の人形劇における文化交流史にかなする貴重な記録の宝庫である。
- 11) 吹田市の文化会館「メイシアター」設立に関連して阪本氏が発表したいいくつかの『出口座』掲載記事では、氏のこのようなスタンスが明確に表明されている。たとえば、「メイシアター小ホール(二)」(『出口座』第3期13号、通巻129号、1986年5月掲載)に転載された、吹田市長宛の要望書には、「商業主義的演劇 テレビやマンガ本大半のい

わゆる低俗退廃文化の氾濫している中にこそ 浄化剤が必要であり 一つのでだてとしての小演劇活動 地域に根をおろす人形芝居の積極的文化活動が その浸食をはばむもの」との考えが表明され、その活動拠点としてのホールの設置を切望する内容であった。

- 12) これらの演目のうち、北摂の民話に取材した7作品の脚本は阪本一房『出口座民話脚本集』（私家版、1996年）として出版されている。
- 13) 人形劇団「クラルテ」の芳川雅勇氏の回想によれば、戦前の人形劇運動で結成された劇団が治安維持法により解散させられた後1941年に結成された関西人形劇連盟の下の移動人形劇場において、江上フジ作による『和尚さんと小坊主』のマリオネット公演を観劇したことが記されている。前掲芳川雅勇「大阪に於ける人形現代演劇運動の軌跡（一）」、10頁。
- 14) 阪本一房「吹田人形劇研究会（二）」、『出口座』第1期ろ号（通巻2号）5頁。
- 15) 大阪人形座時代に使われていたランプの精の頭部のみ現存している（1954年制作）。
- 16) 記録によれば、1976年10月公演以降、出口座の公演時に浅野孟府氏のアニメーション映画作品『羅生門』で使用した人形4体が展示された。
- 17) 滝沢恭司「『美術』の進出：人形座にみる大正新興美術運動の様態」『立命館言語文化研究』第22巻第3号（2011年1月）、17頁。
- 18) 小代氏の氏名の表記については資料によって異なるものが見られ、若干の混乱が見られるようである。
- 19) 山下恵子「俵業師」『阪本一房懐古展資料集』、12頁。
- 20) この時の公演については次の文章で触れられている。無署名（阪本一房氏の筆だと思われる）「ウニマのこと」、『出口座』第1期す号（通巻47号）、表紙裏。
- 21) 山下恵子「『羅城門の鬼』の制作日々（出口座日誌より）」、『阪本一房懐古展資料集』、13頁。
- 22) 山下恵子「二魂坊」、『阪本一房懐古展資料集』、17頁に手稿原稿表紙写真が掲載されている。
- 23) 阪本一房「あとがき」、『出口座』第4期ろ号（通巻172号、1989年12月）に歌詞が記されている。
- 24) 「月の光でさらしゅっさい」『出口座』第4期え号（通巻180号、1990年8月）、6頁。
- 25) このイベントの様子は、吹田市広報番組『お元気ですか！吹田のみなさん』2017年11月11日号で特集が組まれ、詳細が報道された。映像は、吹田市役所ウェブサイト（広報課のページ）にてオンラインで閲覧できる。